



慶應義塾大学ビジネス・スクール

パリ・オランジュリー美術館展

5

1998年11月13日15時、Bunkamuraの代表取締役副社長（館長）である清水嘉弘は、パリ・オランジュリー美術館展の開会式にあたり、Bunkamura 10周年の最大の企画である本展覧会開催までのこれまでを振り返るとともに、Bunkamura プロジェクトに関わりすでに13年が経過した今、改めて、開業準備室時代、開館時のオープニングセレモニー、柿落とし、開業後の10年間の各ホールの開催した公演・展覧会等の企画の数々を思い出し、感慨に耽っていた。

10

この展覧会の開催の背景には、1998年のBunkamura ザ・ミュージアムの10周年企画を3年前（1995年）から検討していたこと（パリ・オランジュリー美術館展以外にザ・ミュージアムの企画のコンセプトである4つの柱に沿った5企画が検討の遡上に上がっていた。）、1981年より着手されているフランス国家あげての大プロジェクト「大ルーブル計画」の一環としてオランジュリー美術館の改修工事が行われること、1998年が日本におけるフランス年であること、日本テレビが開局45周年であるということがあった。

15

清水は、1993年11月18日、ルーヴル美術館創立200年祭で、話題のガラスの大ピラミッドのお披露目パーティーへ招待された際、あるフランス政府高官より、「大ルーブル計画」の一環として、老朽化のすすんだオランジュリー美術館の改修工事を計画しており、来春（1994年）に議会に上程するという耳よりの情報を得た。その場で清水が考えたことは、これまで、オランジュリー美術館の収蔵品はまとめてオランジュリー美術館以外で一堂に公開されたことはなく、もしかしたらこの機会に世界で初めて引越しのオランジュリー美術館展が開催できるかもしれないということであった。清水は、日本に戻り直ちにBunkamura ザ・ミュージアムのスタッフと協議し、オランジュリー美術館側に対して引越しの展覧会を提案した。そして早急に、フランス側の国、市、美術館関係者と条件面、期日、カタログ等の事前の打合せを始めた。ところが、何度かの打合せの後、突然収蔵品を持たない民間運営によるBunkamura ザ・ミュージアムには、国の財産である作品は貸せないとの問題が持ち上がってしまった。この難局を乗り切るため、オランジュリー美術館側と粘り強く交渉を進めた結果、全国ネットの放送局との共催であれば可能

20

25

30

このケースは慶應義塾大学大学院経営管理研究科教授和田充夫の指導の下、(株)東急文化村前副社長清水嘉弘が、同社大村敬、高山典子の協力をえて作成したものである。
本ケースは特定の経営状況の功拙を提示するために作成されたものではない。(平成14年9月)